C組1枚目

3年生が宝塚市に取材し、記事を書きました

宝塚市の全面的な取材協力と、一部写真提供も受けました。
記事・レイアウトは産経新聞社の協力を得て作成しました。

雲雀丘新聞

令和5年(2023)
3|23[木]

雲雀丘学園中学校
〒665－0805
兵庫県宝塚市雲雀丘4－2－1
TEL：072－759－1300
FAX：072－755－4610

命守る「迅速行動」

消防本部情報管制課

出動備え 工夫こらし

雲雀丘学園中3年の取材班が昨年12月、宝塚市消防本部情報管制課の谷口直輝さんを取材した。同消防本部である「宝塚市・川西市・猪名川町消防指令センター」が、3市町の消防通信指令業務を管理する形になっている。谷口さんは、消防車や救急車による訓練の様子を紹介し、工夫して街の安全を守っている仕組みを教えてくれた。

宝塚市は、コンビニエンスストアにAED（自動体外式除細動器）を設置したり、インスタグラムやフェイスブックなどのSNSも活用している。ほかにも、インターネットで緊急通報できる「ネット119」や、高齢者が、ペンダントを押すだけでかんたんに通報できる「119ペンダント」なども導入している。

工夫しなければならないのには、理由がある。現在宝塚市の人口は22万人いるが、消防職員240人、救急車7台の運用で市内を カバーしている。そのため、救急車や消防車の点検を欠かさずに行い、いつ来るかわからない出動指令にこたえている。

宝塚市消防本部の指令センターを見学する雲雀丘学園中の生徒たち

谷口さんは「個人の心の準備も、いつでも出動できるようにしている」と話してくれた。現場で消火活動をする人、指令センターでバックアップする人、消防士一人ひとりが、常に公務員である自覚を持つことが必要だと思った。

それでは、具体的にどのような工夫をしているのだろうか。谷口さんは「組織の工夫」と「個人の工夫」があると話してくれた。

組織の工夫として、谷口さんは出動準備のために、災害の種別や発生場所が判明した時点、先に放送を流す「予告指令」を取り入れている、と話してくれた。

個人レベルでは、たとえば服を蛇腹に折っておけば、早く着ることができるし、着替える順番を決めておき、ヘルメットも毎朝調節している。

一秒一秒が大切なのは、現場への出動部隊も、指令センターでバックアップしている職員も同じである。火災や救急の電話をかけてくる通報者は、気が動転している場合も少なくない。職員は電話で通報を聞き、通報者をなだめながら、一方では救急車を要請し、予告指令を流すことで、準備を進めさせている。

細かいところまで、いろいろな行動を教えてもらって、市民の安全を守ろうという消防職員の強い思いを感じとることができた。

（稲垣隆之亮、大野真緒、草野夢佳、篠田さくら、田中馨也）

子どもの未来 つくる

たからっ子総合相談センター「あのね」の内観

雲雀丘学園中3年の取材班が今年1月、宝塚市子ども政策課を取材した。子ども政策課の人たちは「宝塚市の子どもがすくすく育ち、平等に、幸せな大人になれるような政策をしていきたい」と話した。（中川哲志、中川ロシェル、幣知記、細川彩心）

子ども政策課 新相談センター注力

子ども政策課は、宝塚市の「子ども未来部」の中にあり、同部には、ほかに子育て支援課、保育企画課や市内の保育所なども含まれる。児童虐待への対応のほか、待機児童の解消や、放課後児童対策の充実などにも取り組んでいる。その中で子ども政策課は、さまざまな計画を立案し、ときには主体となって事業を実施しているという。

現在、子ども政策課が最も力を入れている事業は何かを聞いた。子ども政策課の人たちがもっとも力を入れてきたのは、新しい施設「たからっ子総合相談センター『あのね』」だという。取材後の2月13日にオープンした。

「あのね」は、お母さんが妊娠中から相談できる。出産後も、子どもが0～18歳までの間、どんな悩みごとも相談できるという。

子ども自身が相談することもできるし、匿名でも相談ができる。宝塚市に住んでいる人や、宝塚市内の学校に通っている人と保護者も相談できる。子育てをする親、そして子どもに対して切れ目のない支援を行おうというねらいだ。

子育てに関する話題のうち、注目が高いのは児童虐待だ。全国の相談件数は毎年増加し、宝塚市でも、平成29年度の430件から、令和3年度の712件へと大幅に増えた。たとえば子ども政策課の職員によると、児童虐待防止法が平成12年にできてから、虐待に気づいたり、通報する人が増えたのだという。

取材班のメンバーからは「自分が住む宝塚で、どんな子育て支援策が行われているのかが分かってよかった」との意見も出た。

「尊重」と「認め合い」 議会まとめる秘訣

三宅浩二 市議会議長インタビュー

宝塚市が進むべきさまざまな方向性を考え、市長とともに、未来に向けて宝塚市をつくりあげていく宝塚市議会。私たち雲雀丘学園中3年の取材班は昨年12月、市議会議長の三宅浩二市議と、議会運営委員会委員長の田中こう市議を取材した。

議会のことを、市民の人にもっと知ってもらおうと考えている2人に話を聞いて、有権者である市民と真摯に向きあっている姿を垣間見ることができた。

市議会議員を16年務めてきた三宅さん。令和3年から議長を務めてきたが、よかったことを聞くと、宝塚市がホストとなって、議長表したり、議会の内容の報告会を実施したりしている。ほかにも、最近、3台の液晶モニターを取り入れて、わかりやすく質問ができるようにしていることもあるなどと教えてくれた。

また三宅議長と田中市議は、若い世代に、政治に関心を持ってもらうために、議会がどのようなものかをもっと知ってもらうことが大切だ、と話していた。

インタビューをしている間、2人とも笑顔で答えてくれて、和やかな雰囲気に包まれた。お互いを尊重し、認め合って議論できていることにより、宝塚市をもっといい自治体にしていくことができると思う。

（大原梨奈）

年に4回定例会が開催されている宝塚市議会を代表し、議会を主宰するのが議長の仕事だ。市長をトップとして、市政を担っている市役所から出される市政の方針や条例案、予算案などについて26人の市議会議員が話し合い、決定していく。限られた会議時間の中で、話にもっと知ってもらおうと考えている2人に話を聞いて、有権者である市民と真摯に向きあっている姿を垣間見ることができた。

今までに行った取り組みを聞いたところ、平成23年に施行された議会基本条例のことを教えてくれた。宝塚市のホームページによると、議案について各議員が賛成したか反対したかを公表したり、議会の内容の報告会を実施したりしている。ほかにも、最近、3台の液晶モニターを取り入れて、わかりやすく質問ができるようにしていることもあるなどと教えてくれた。

また三宅議長と田中市議は、若い世代に、政治に関心を持ってもらうために、議会がどのようなものかをもっと知ってもらうことが大切だ、と話していた。

インタビューをしている間、2人とも笑顔で答えてくれて、和やかな雰囲気に包まれた。お互いを尊重し、認め合って議論できていることにより、宝塚市をもっといい自治体にしていくことができると思う。

（大原梨奈）

市議会の議場で説明を受ける雲雀丘学園中3年の生徒たち

みんなで「ごちそうさま」

学校給食課の思い

私たち雲雀丘学園中の取材班は、宝塚市学校給食課で大切にしていることを聞く上で、給食を作る上くと、「アレルギーがある人へ配慮すること」と「食育」という答えが返ってきた。

学校給食課は、食材の発注や献立作成、栄養管理などを行っている。献立の作成は、栄養教諭が行うが、その月の行事食や、食物アレルギーを配慮しながら、栄養のバランスを考え、1カ月の献立を考えていくという。

アレルギーがある人でも安心して給食を食べることができるよう、原因食物を取り除いた除去食を提供する。例えば、卵アレルギーの人がいる場合は、卵を入れる前のスープを提供している。

みんなにおいしい給食を食べてもらえるよう工夫している。

宝塚市が特に力を入れているのが、「食育劇」だ。調理員のみなさんが、率先して市内の学校を訪れ、自分たちで演劇を披露し、食育について学んでもらおうという取り組みだ。この取り組みをずっと続けているのは、阪神間では宝塚市だけである。

使う食材については、国産で無添加のものを使用し、宝塚市内の代表的な農産地である西谷地区で収穫された野菜を月に1回ほどのペースで使っている、と教えてくれた。

また給食のレシピを、インターネットのサイト「クックパッド」や、動画投稿サイト「ユーチューブ」などで配信しているのも珍しい取り組みだ。取材班のメンバーもレシピの冊子の提供を受けた。

さまざまな工夫を凝らした地元産品の食材を使うなど、取材して、宝塚市で学校給食に携わる関係者の温かい思いが伝わってきた。

（田山直弥、松田瑠奈、松原明桐、柳井百華、山岸大祐、山本桜香）

土こだわり 植物育成

山本地区・あいあいパーク

宝塚市の山本地区は、古くから植木栽培が盛んで、日本三大植木産地の一つにも数えられている。宝塚市の植木産業について、あいあいパークの西本健さんに取材した。また宝塚の市花であるダリアについて、宝塚市北部振興企画課の佐藤隆政さんにもインタビューした。

山本地区で植物を栽培していた昔の人は、豊臣秀吉の時代には接ぎ木の技術を発明し、木接太夫の称号を贈られた。接ぎ木とは、複数の植物をつなぎ合わせて一つの植物として育てる方法のことだ。この方法は品種改良や大量生産のために利用された。

花と緑に関する情報を発信する役割をになっている「あいあいパーク」に勤める西本さんは、植物の魅力として「いっしょに生きているという実感を持つことができる」と話してくれた。取材をして、いっしょに生きていく何かがあることは、心強いのではないかと思った。

あいあいパークでは、植物を育てるとの「土」にもこだわっている。特定の植物専用の土があったり、植物栽培を楽しもうという人向けに、土を一から作るための、土の「原料」も販売するなどしている。

また、宝塚が、日本有数の産地となっている花に「ダリア」がある。栽培の歴史も長く、佐藤さんによると、令和3年に栽培から90年を迎えたことから、市の花に追加された。球根として、毎年約60万球も出荷されているという。

未来に向けては、食料品や入浴剤などの新しい特産品づくりも進められている。

いろいろな工夫を行って、特に若い人にも、園芸や植物栽培に興味をもってもらおうと、宝塚市のいろいろな担当の人たちががんばっていることが、取材をしてよくわかった。

（奥山琴梨、酒井佐良、長久弥生、並木竜ノ介、西村名央、山本真央）

山本地区で植物を栽培し「あいあいパーク」に勤める西本さん